二〇二三年度

入学試験問題

国語

注意

・問題は十七ページにわたって印刷してあります。
・試験時間は五〇分です。
・声を出して読んではいけません。
・答えは、問題の指示に従って、解答欄の決められた場所に濃く、はっきりと書きなさい。
・答えをなおすときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
・字数指定のある問いはすべて、句読点・記号も一字と数えるものとします。
・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

学校法人 東洋大学

東洋大学京北高等学校

1

次の問いに答えなさい。

問一　(1)～(5)の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1)　大事な客としての**タイグウ**を受ける。

(2)　危険な**ヨウソ**を含んでいる。

(3)　新製品の資料を**ハンプ**する。

(4)　父が娘のわがままを優しく**サト**す。

(5)　インフレを**ソシ**する。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

和歌山県田辺市の入り江に迷い込んだ①マッコウクジラが、自力で湾外に泳ぎ出た。気をもませること②18日。陸から遠ざけようと手を尽くした人たちの心が通じたか、やつれた巨体はきのう、③ゆっくり沖へと向かった。なんとか外洋に出て生き延びてほしい。④腹をこするほどの浅瀬は死ぬ苦しみだったに違いない。なにしろ、1千～3千メートルの深海と海面を行き来している種である。まだ深く潜れぬ子のため、親はイカを捕りに潜り、潜水の教育もするらしい。迷いクジラの餌場とみられる紀伊半島沖を含め、海の面積の9割近くは深さ千メートルを超すという。もはや光は届かず。水温は5度を切る。100気圧の水がのしかかる⑤闇の世界だ。

（朝日新聞『天声人語』）

(1)　①だ　の品詞名として正しいものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　副詞　　**イ**　形容動詞　　**ウ**　助詞　　**エ**　助動詞　　**オ**　連体詞

(2)　②せる　と文法的に同じ意味の語を含む文を、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　君が見せる写真に興味がある。　　**イ**　わたしが貸せるのはこれだけだ。

ウ　赤ん坊を笑わせるのは大変だ。　　**エ**　君とは何でも話せるよ。

オ　酷暑の中での活動は気力もうせる。

(3)　③ゆっくり　と**異なる**品詞であるものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　静かに　　**イ**　すこぶる　　**ウ**　とりわけ

エ　そっと　　**オ**　たぶん

(4) ④腹をこするほどの浅瀬は死ぬ苦しみだったに違いない。は、いくつの文節から成り立っているか。漢数字で答えなさい。

(5) ⑤闇の世界だ。の主部に当たる言葉としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 入り江に迷い込んだ迷いクジラは、　**イ** 親が潜水の教育をする浅瀬は、
ウ 海の面積の9割近くを占める深海は、　**エ** まだ深く潜れぬ子のためには、
オ 100気圧の水が、

問三 (1)～(3)の傍線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しなさい。

(1) 懈怠(けだい)の心、みづから知らずといへども、師これを知る。
(2) 民部卿(みんぶきやう)の典侍(すけ)のせうとにてぞおはしける。
(3) 直衣の、いみじうはなばなと、裏の艶など、えもいはずきよらなる。

問四 (1)、(2)の傍線部の古語の意味としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1) いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

ア 終わることのない時　**イ** 病気が治った時　**ウ** 悩みごとがない身の上
エ 尊い身分　**オ** 栄えている所

(2) 帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。

ア 大切にして　**イ** いつ来ても　**ウ** 五月には
エ 何度でも　**オ** 一度に

問五 **ア**～**オ**の作品を成立年代の古い順に並べたとき、三番目にあたる作品を記号で答えなさい。

ア 竹取物語　**イ** 万葉集　**ウ** 方丈記
エ 源氏物語　**オ** 徒然草

問六　(1)～(3)の人物と関わりの深い作品を、**ア**～**オ**から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(1)　志賀直哉

ア『浮雲』　**イ**『こころ』　**ウ**『雪国』
エ『しろばんば』　**オ**『暗夜行路』

(2)　芥川龍之介

ア『伊豆の踊子』　**イ**『走れメロス』　**ウ**『二十四の瞳』
エ『杜子春』　**オ**『細雪』

(3)　紀貫之

ア『更級日記』　**イ**『古今和歌集』　**ウ**『日本霊異記』
エ『蜻蛉日記』　**オ**『雨月物語』

問七　次の漢文の傍線部の書き下し文としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

若以与我、皆喪宝也。不若人有其宝。

シテ　ヘバ　ニ　レ　レ　ヲ　ト　カ　ゴトニ　スルニ　ノ　ヲ
レ　三　二　一

ア　若し人ごとに其の宝を有するに若かざるなりと。
イ　其の宝を有するに若人ごとにならざると。
ウ　若からずと人ごとに宝を其の有するにと。
エ　人ごとに有するに其の若かざる宝と。
オ　人ごとに其の宝を有するに若かずと。

2

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

きのう、郷里にいるおふくろから電話で、東京ではもう綿入れ半纏[*1]など要らなくなったろうから、送り返してよこすようにといってきた。ちょうど電話番の妻が外出中で、長女がそれを聞いて私に伝えた。

①「ワダエレって、なに？」

長女は、妹たちのように東京の病院ではなく郷里の家で生まれて、おふくろに抱かれて育ったせいか、おふくろの田舎言葉は大抵わかるが、それでも時折、わからない言葉が出てきて面くらう。

おふくろのいうワダエレというのは、毎年秋になると自分で拵えて送ってよこす、綿のぼってりと入った半纏のことだ。

私は、仕事をするときは、真夏でも、シャツなしの肌襦袢[*2]で和服を着ないことには落ち着かないが、その仕事着の和服の上に着る半纏である。

おふくろは、六月がくれば満で八十歳になるが、まだ自分で針仕事をする。もう以前のように袷[*3]や羽織[*4]を縫うというわけにはいかないが、半纏や子供の浴衣ぐらいなら他人に手伝って貰わなくても縫うことが出来る。針の穴に糸を通すことも、自分でする。とてもいちどでは通らないが、老眼鏡を鼻眼鏡にして、何度でも根気よく試みる。私が帰省していて、そばにいても、ちょっとこれを通してくれとはいわない。見兼ねて、

「どれ、貸しなさい。」

というと、恥ずかしそうにほっほっほっと笑って、

「どうも近頃は、目が駄目になってせ。」

という。

そんな有様だから、一枚の半纏が出来上るまでには、長い時間がかかる。夏、一と月遅れの盆に一家で帰って、そろそろ東京へ引き揚げようというころになると、おふくろは思い出したようにどこからか私の半纏を持ち出してきて、仕立て直しに取りかかる。

「綿は沢山入れなくていいですよ。東京はここみたいに寒くないから。」

私はいつもそういって引き揚げてくるのだが、②十一月ごろ、速達の小包便で届いたのを開けてみると、いつものように綿がぼってりと入っている。

私は、子供のころ、座敷の畳の上に布団や丹前[*5]をひろげて綿入れをしているおふくろの両肩にふんわりとまるくのっかっている真綿の玉を、まるで綿飴にそっくりだと思って眺めたものだが、いまでもおふくろがそんなふうにして私の半纏に綿を入れるころは、郷里はもう霜が降りる季節だから、背中が冷え冷えとして、それでつい、肩に真綿を余計にのせてしまうことになるのだろうか。

それはともかく、せっかくだから、私はその半纏を着て一と冬を過ごす。そうでなくても、この四、五年来、私はみっともなく太ってしまって、この半纏を重ね着するといよいよ

まるく膨れてしまう。とても人前には出られないが、自分の部屋にいる分にはべつに不都合なこともない。

私は、冬は炬燵で育ったせいか、スチームとかストーブのたぐいは苦手で、部屋全体が暖まると、頭がぼんやりしてきて眠くなる。それで、いまでも冬は炬燵だけだが、やはり東京でも寒中の夜明けなどには、外の寒さが肩や背中に貼りついてくる。そんなとき、この半纏があると、随分助かる。これを着ていると、どんなにシバレる晩でも（私の郷里ではひりひりする寒さのことをそういっている）肩や背中に寒さを感じるということはない。炬燵に顔を伏せて居眠りをしても、ごろ寝をしても風邪をひかない。夜なら、そのまま外へ出ればハーフコートぐらいの役目はする。

半纏の生地はほとんどおふくろの着物のお古である。おふくろはもう八十だから、大抵の着物は若くなって、けれどもまだまだ着ようと思えば着られるものを、ほどいては半纏に仕立て直すのである。新しい半纏を拵えると、小包にして送ってよこす。小包のなかにはかならず手紙が入っていて、それには、これはいくつのとき着た着物の生地で、その着物を着てどんなところへいったかというメモのようなことが書いてある。おしまいには、

『ちょっと悪くない品物でし』

と書いてある。

なるほど品物は上等らしいが、なにぶん古いし、こちらは作業衣のつもりで容赦なく着るから、春先になると、袖口や裾は摩り切れ、袖の付け根の裏がさんざんに綻び、襟が光り、背中や肩には一面になかの真綿がちいさな玉になって噴き出してくる。

毎年、春になると、こいつももう寿命が尽きたと思って郷里へ送り返してやるのだが、秋にはまた見違えるように小ざっぱりと仕立て直したのが送られてくる。相変らず、綿もどっさり入っている。

おふくろと電話で話した長女に、

「ほかに、なにかいってなかったか？」

と尋ねると、

『今度もまた騙されたなあ。おらは、がっかりしたえ』

おふくろがそういっていたと、長女はいった。

「なんだか元気のない声だったわ。お祖母ちゃん、かなり参ってるみたい。」

そういうので、私がちょっと笑って、頭をくらくらさせて、

「でも、仕方がないなあ。」

というと、長女も頭をくらくらさせながら、

③「そうね、仕方がないわ。」

といった。

おふくろは、このところ心身の不調に陥っている。軀の方は、これはもう持病のようなものだが、心臓の具合が思わしくなくて、ときどき狭心症の軽い発作に襲われる。四、五年前

までは、誘いの手紙を出すと、[1]汽車で十時間あまりの長旅をして出てきたものだが、④もうそれも出来なくなった。

見たところ、前に比べて[2]弱ったとも思えないが、診て貰っている医者に、[3]東京へいってきたいがどんなものだろうかと伺いを立てると、前にはすぐ、いってらっしゃいといって滞在する日数分の薬をくれたのに、近頃は気の毒そうに、無理ではないだろうかというそうである。いきたいならいっても構わないだろうが、その代わりあとの責任は持てないというそうである。おふくろは、自分ではなにほどのこともないと思っているが、長旅のあとでどうなるものやら、勿論、自分でも見当がつかない。まわりに迷惑をかけるのがこわくて、おふくろは郷里の家のなかで足踏みをしている。

長女が生まれたとき、おふくろは六十七歳だったが、この子が小学校へ上るまでは死なないといった。小学校へ上ると、今度は卒業するまでは死なないといった。実際、その通りになって、長女は小学校を卒業したが、おふくろはもうくたびれたのか、今度は中学校を卒業するまではという代わりに、長女が中学校の入学式へ出かけるところが見たいといった。

どうぞ、どうしてもそうしたいというのなら——私たちはそう返事をして、そのときは妻が迎えにいくことにきめていた。ところが、この春先の寒さが、思いのほかおふくろにはこたえた。その上、三月の半ば過ぎに、新潟県の小千谷に住んでいた叔父のひとりが、急に亡くなったことがこたえた。

この叔父は、慶応出身の医者で、まだ六十六だったが、心筋梗塞で急に亡くなってしまった。小千谷に住む前は、長く横浜の鶴見に住んでいて、私の兄や姉たちが[4]世話になった叔父である。私は、この秋、せっかちにも自分から生涯を閉じてしまった兄や姉たちの足跡をつぶさに辿って、私たち一家の忌わしい血の歴史を長篇小説に書くつもりだが、この叔父には沢山聞かせて貰いたいことがあったから、小千谷の従妹から急死を知らされたときは、茫然とした。

おふくろへは、私が電話で知らせた。しばらく雑談してから、

「ちょっと悪い知らせがあるんだけど……椅子に腰かけてますね？」

と確かめてから、叔父の訃報を伝えた。

おふくろは、ちいさな悲鳴を上げたが、思いのほかしっかりした声で、私に弔問の際の心得を話したり、叔母や従妹へのことづけを託したりした。そのあと、しばらく黙っているので、声をかけると、おふくろは、受話器をちゃんと耳に当てているからそんな大声を出すことはないといって、唐突に若いころの思い出話を一つした。

上京するたびに、亡くなった叔父にアイスクリームを御馳走になって、すると食べ馴れないアイスクリームの冷たさに、咳が出て止まらなくなったという、他愛もない思い出話である。

「キッちゃんに（叔父の名は吉平という）アイスクリームで咳をするのはジャイゴタロだと、よく笑われたなあ。」

⑤歌うようにそういうおふくろの声が、尻すぼまりにかぼそくなって、不意に受話器を置く音がした。

ジャイゴタロは、在郷太郎だろう。私の郷里では山里の人のことをそういっている。

それ以来、おふくろはすっかり元気をなくしてしまった。**5** 上京出来そうもないので、春休みに、こちらからみんなでおふくろを慰めに帰ることにして、乗物の手配も済ませ、郷里へも帰る日時を知らせておいたところ、出発の前々日になって、次女が高い熱を出して寝込んでしまった。

それで帰郷は取り止めになったが、おふくろが騙されたといっているのは、そのことである。摩り切れた半纏も、自分で持って帰るつもりだったのがそのままになっているので、おふくろはくやしまぎれに、さっさと送り返せといってきたのだろう。

私は、おふくろが針仕事をしながらしゃぶる抹茶飴を一(ひ)と袋、半纏の袂(たもと)*6に入れて荷作りをしながら、それにしても近いうちにいちど田舎へ帰ってこなければなるまいと思った。

（三浦哲郎「おふくろの消息」『盆土産と十七の短篇』所収　中央公論新社）

＊1　綿入れ半纏……綿の入った半纏(はんてん)のこと。半纏とは、羽織に似ていて、わきに襠(まち)がない、丈の短い上着
＊2　肌襦袢……着物を着るときに必要な下着のこと
＊3　袷……裏地をつけた和服
＊4　羽織……着物の上におおい着る襟を折った短い衣
＊5　丹前……綿の入った袖の広い着物
＊6　袂……和服の袖付けから下の、袋状になった部分

問一　傍線部①「ワダエレ」はどのようなものとして描かれていますか。その説明としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　綿と一緒に「おふくろ」の愛情が詰まっていて、「私」を懐かしい気持ちにさせるもの。「長女」にとっては「ワダエレ」という言葉自体に馴染みがないことを提示することで、「おふくろ」と「私」「長女」三世代の生き方の差異を表すものとして描かれている。

イ　「おふくろ」が「私」への愛情を込めて毎年仕立ててくれるもの。現在の「私」はなかなか「おふくろ」と会う機会もなく、外見も変化し年齢も重ねてしまったことを示すことで、「現在」と二度と戻れない「過去」との間を往復するものとして描かれている。

ウ　年をとった「おふくろ」が仕立ててくれていると思うと「私」を嬉しくももの悲しい気持ちにさせるもの。着る度に「おふくろ」を思い出し、「おふくろ」の年齢をいやでも感じさせることを暗に示すことで、親孝行をしたいと願いつつもできない「私」のふがいなさと愛情を象徴したものとして描かれている。

エ　「おふくろ」が毎年仕立て直して「私」に送ってくれるもので、郷愁をさそうもの。「長女」にとっては「ワダエレ」という言葉自体理解できないが、「私」と「おふくろ」二人の間をそれぞれの思いとともに行き来するものとして描かれている。

オ　「おふくろ」が「私」のために時間と労力をかけて仕立てて送ってくるもので、「おふくろ」自身の思い出も詰まっているもの。「私」の小さかった頃の「おふくろ」の様子を回想することによって、「私」が「おふくろ」の思いを家族に引き継いでいきたいという祈りをこめたものとして描かれている。

問二　傍線部②「十一月ごろ、速達の小包便で届いたのを開けてみると、いつものように綿がぼってりと入っている」とありますが、このときの「私」の様子について説明したものとしてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人に手伝わせようとせずに一人で針仕事をする意固地な「おふくろ」の姿を思い出し、当時と変わらないことを懐かしんでいる。

イ　東京は故郷ほどには寒くないと伝えたにもかかわらず、北国仕様の綿がたくさん入った半纏が届いてどう着用したらいいのか思いを巡らせている。

ウ　長年綿入れをしている「おふくろ」の様子を思い浮かべ、息子が寒い思いをしなくてすむようにという母の思いを汲み取っている。

エ　一家が帰った後の寂しくなった家で一人針仕事をしている「おふくろ」の姿を想像し、自分が側にいてやれない罪悪感を感じている。

オ　東京では北国ほど寒くないため綿がぼってりと入った半纏は必要ないが、「おふくろ」が作ったものだから着ようと用途をあれこれ考えている。

問三　傍線部③「そうね、仕方がないわ」とありますが、「仕方がない」という言葉の指す内容と、このときの「長女」についての説明としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「お祖母ちゃん」の具合が悪いため、今年は父親の半纏を仕立て直してもらうことができないのは仕方がないと納得し、親と同じ行動をとることによって悲しみを分かち合おうとしている。

イ　心臓に負担がかかるため「お祖母ちゃん」はもう東京に来られないが仕方がないと察し、親と同じ行動をとることによって落胆した気持ちを二人で共有しようとしている。

ウ　「お祖母ちゃん」の体調を考えると長旅ができず入学式の姿を見せられないが仕方がないと認識し、親と同じ行動をとることによって落ち込んでいる父親を慰めようとしている。

エ　医師に止められて「お祖母ちゃん」は東京に来ることができず、自分たちも故郷に帰ることができないのは仕方がないとわきまえ、親と同じ行動をとることによって寂しさを紛らわそうとしている。

オ　「次女」が熱を出したため一家で故郷に行くことができず「お祖母ちゃん」と会うのは先延ばしになってしまったが仕方がないことを理解し、親と同じ行動をとることによってお互いの思いを確認しようとしている。

問四　**1**～**5**にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを、**ア**～**カ**からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号を二度使ってはいけません。）

ア　とても　　**イ**　きっと　　**ウ**　随分　　**エ**　ちょっと

オ　早速　　**カ**　それほど

問五　傍線部④「もうそれも出来なくなった」とありますが、その様子を比喩的に表現した一文を本文中から抜き出し、**最初の五字**を答えなさい。

問六　傍線部⑤「歌うようにそういうおふくろの声が、尻すぼまりにかぼそくなって、不意に受話器を置く音がした」とありますが、このときの二人について説明したものとしてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「おふくろ」は生前の叔父との何気ない日常を思い出し悲しんでいるが、「私」は自分が想像するよりも案外しっかりした母の様子に安堵（あんど）している。

イ　「おふくろ」は元気だった叔父の急死を受け入れられず動揺し、「私」はそんな母の様子に驚き、すぐにでも田舎に帰りたいと思っている。

ウ　「おふくろ」は叔父の死に衝撃を受けつつも息子には心配をかけまいと強がり、「私」は母をこれ以上落ち込ませないよう明るい話につき合おうとしている。

エ　「おふくろ」は元気だった頃の叔父の姿を思い出した後でより深い喪失感を抱き、「私」はそんな母を思い案じている。

オ　「おふくろ」は悲しみの中にいながら息子にはそれを隠し通し、「私」はそんな母の思いに気づくことで母の悲しみに寄り添っている。

問七　本文の内容の説明として**適切ではない**ものを、**ア**～**オ**から**すべて**選び、記号で答えなさい。

ア　「おふくろ」は毎年自分の誕生日の六月頃から十一月頃まで、古い着物を出してきては息子のために半纏を縫う作業を長年続けている。年をとって眼が悪くなり「私」が声をかけても決して人に手伝わせようとはせず、一人で針仕事をする。

イ　東京で暮らす「私」は仕事をするときには和服を着るというこだわりがあり、その上に着る半纏を「おふくろ」に毎年仕立ててもらっている。冬場スチームやストーブを使わなくても、綿のたっぷり入った半纏は「私」の肩や背中を温めてくれる。

ウ　「おふくろ」の送ってくる半纏の中には品物は上等なものも古いものもあり、袖口や裾が摩り切れているため冬のうちに寿命が尽きてしまうものもある。文句を言いつつも「私」は「おふくろ」の息子を思う気持ちを心中では嬉しく思い、「おふくろ」に感謝しながら半纏を着続けている。

エ　「叔父」に「アイスクリームで咳をするのはジャイゴタロだ」と言われて笑われたことは、「おふくろ」にとって若かりし頃の思い出として心に残っている。その「叔父」の訃報に「おふくろ」は胸を痛めたが、気丈にも「私」に弔問の際の心得や「叔母」や「従妹」へのことづけを託した。

オ　年をとった「おふくろ」は心臓の持病の上に「叔父」の死が重なり、元気をなくしてしまっている。そんな母親のことを心配する「私」は、「おふくろ」を上京させて家族一緒に暮らすために、近いうちにいちど田舎へ帰らなければと思っている。

3

次の文章を読んで、問いに答えなさい。なお、出題に際し見出しなどを省略しています。

国家を中心に教える学校、全国のことしか伝えないマスメディア。こうしたものを通じて次第に「地域」が私たちの前から姿を消しつつある。人によってはもはやそれが認識にのぼることすらない状況が起きている。ここに示されているのは、個人と国家の間にあるべき地域を抜いて、個人が国家に、あるいは世界に直接向き合っている、そんな構図である。

だが、国家や世界に対して剝き出しとなっている個人は危うい。人がもし、個人として「わたし」をとらえ、自分の暮らしを、「わたし」のみの力で実現しようとすれば、それは不幸な人生になるだろう。【ア】

近代以前の人々は、家や村や町、あるいは幕府や藩という体制の中でしか生きられなかった。だが、逆に言えばこれら個別の社会が、人々に生きる条件を与えてくれていた。【イ】

現代日本では、こうした家や地域のような中間項が解消され、あるいは否定されて、国家が人々の独立（孤立）をうながし、また個人（一人一人の国民）であることを保障するようになっている。煩わしいことから解放された「個人」は望ましいもののように見える。だがこの個人は、国家という大きな容器が現れてはじめて実現されたものである。【ウ】

それゆえ個人主義というものは、一見そこから縁遠くみえる国家ナショナリズムと非常に親しい関係にある。それどころか、個人主義はしばしば容易に国家ナショナリズムに転換する。最も個人主義的な①インターネットの言説空間で、最も強烈な国家ナショナリズムが台頭しているのはそのためである。【エ】

そこでは、弱者批判や地方切り捨て、国家の高度武装化、トップの専横の容認や全体主義の礼賛といった、これまでの常識では考えられないような言説が、政治学者でも政治家でもないふつうの人々の間で展開されている。そこではどうも、この国の挙国一致体制をさらに進めてより完全なものとし、海外との経済競争に打ち勝つべくしっかりとした体制を整えよという主張さえ広がっているようだ。個人が国家として発言を始めている。だがそこにいるのは、自分自身がこの国を支え、犠牲になることも厭（いと）わないという強い個人では決してなく、自分という存在を守ってくれる国家を確かなものにしておきたいという他力本願な弱者でしかなさそうだ。強い国家への希求は、そうした弱者に芽吹く存在論的不安からはじまるものである。【オ】

自分を守ってくれる国家を維持するために、同じ国民でもあるはずの社会的弱者や、国家主義に反対する者を排除して、より強い国家体制を確立しておきたいという浅薄なナショナリズム。本来、グローバル化に抗し、国内の人々を守るために作り上げたはずの国民国家が、自分の内部にあるものを否定し、その一部を排斥しはじめている。これでは本当に強い国家などは実現するはずもない。国家というものは、具体的には下から、国民や地域の現実の力によってはじめて作られていくものだからだ。排除や分裂を伴う国家は危うい。だが日本のみならず、世界の各国がそうした方向に傾きつつある。

ところで、こうした個人主義の中から立ち現れるナショナリズムに対して、むしろ個人主義をさらに強く推し進めることで国家そのものを否定していこうという、コスモポリタニズムの立場も表明されている。この超個人主義＝脱国家主義的なコスモポリタニズムははたして、ナショナリズムを解消し、国家のない世の中をつくる適切な道筋になるのだろうか。国家の枠を越えた、地球市民による自由な世界社会は実現可能か。

現実にはそうはいかない。というのも、いま世界で沸き起こっているナショナリズムは、そもそもこうしたコスモポリタニズムへの抵抗からはじまっているからである。国家ナショナリズムは自然発生したものではない。これはコスモポリタンな動きに対する防御として生じたものである。

ヨーロッパおよび北アメリカ、あるいは南アメリカやオセアニアは、すでにかなり進んだコスモポリタンな社会である。西ヨーロッパの人々は、ある時から船で世界中にフロンティアを求めて出かけ、先住民のいた地域に武力をも行使しながら進出していった。そこにはキリスト教の布教という目的もあった。ある人々の集団に別の集団が外から入り込み、その集団の枠を取り除いて政治的文化的に自己の集団に同化していこうという動き——端的にいえば、それこそがコスモポリタニズムである。そしてだからこそ、こうした西ヨーロッパの人々が進出した先では激しい対立が長きにわたって生じ、自分たちのものを守ろうとする国家（ないし民族）ナショナリズムの火も強く盛んに燃えさかったのである。そしてまた近年、面白いことに、コスモポリタニズムの最先端といえるアメリカ合衆国で、自国ナショナリズムが強く表れている。②個人主義と同様に、コスモポリタニズムもまたナショナリズムとコインの裏表のような関係にある。

たしかに国民国家という枠組み（国家ナショナリズム）は、グローバル化（コスモポリタンの進入）に直面した際の防衛策として、とりあえずは有効なのだろう。だがそれでその先の状況を乗り越えられるのかといえば、そんなものではないこともまた明白である。

敵国と自国との差異だけを強調し、個人と国家の関係のみを際立たせる国民国家ナショナリズムの思考法には根本的な欠陥が潜んでいる。他方でそれをコスモポリタニズムによって解消しようとしても、それで問題が解決するものでもない。国家ナショナリズムにも、コスモポリタニズムにも、どちらにも大切なものが欠けている。

それは地域である。危険な一国ナショナリズムに対抗できるのは、コスモポリタニズムではなく、その内部に確立される③地域主義——地域ナショナリズム——である。

本書ではこれまで、この日本という国は、国家と地域の両方からの作動によってできていることを強調してきた。国家がなければ地域は成り立たないが、地域がなくては国家も成り立たない。

明治日本の近代国家は、間違いなくこのことを前提にして生まれたものである。だがこの国家を作りあげた際になくてはならなかった地域が、その後の歴史の展開の中でいまや自明のものではなくなってきている。地域に所属せず、国家の前だけにいる国民が多数現れてき

た。

それどころか事態はさらに進み、国民が、国民以前に個人になってしまい、場合によっては国家すら否定してコスモポリタン（無国家人）を主張しはじめている。地球上の各地に国家が確立されていることではじめて私たちの暮らしは安定を得ているのに、その国家を否定して、税を払いたくない、自分だけがよい暮らしをしたい、貧しい人や弱者には関わりたくない、戦争は嫌だ、自分だけは平和に暮らしたいと、そういう人々が現れはじめている。それはとくに富裕層など経済的成功者に多いようだ。

こうした状況の中で、国家の方で「この国を守れ」と号令しても、④人々は思ったようには反応しないだろう。国民の多くはたしかに国家が大事だと思っているが、その国民はただ国家に依存した、つながりのない個人であり、国家に「ああしてくれ」「こうしてほしい」と頼るだけの無力な存在のようである。こうした国民たちに、政府の方で国家への協力や同調を求めても、思い通りの成果が得られないのは当然でもある。

そして実際に二十一世紀に入って、そうした国家への協力を一部の国民や地域に押しつけ、強要することで国家の機能を維持しようとする動きや言説も目につくようになってきた。沖縄は日本の国防のため、米軍基地を受け入れつづけねばならない。新潟や福井、佐賀や鹿児島、愛媛や青森は、この国の電力需要を維持するため、事故を覚悟で原発を動かさなくてはならない。空港や新幹線など、この国の経済活動の根幹となっている高速交通網を維持拡大するため、沿線地域は立ち退（の）きや騒音・振動を受け入れなくてはならない。

国力を維持するために生産性をあげよ。しかしワークライフバランスは維持し、家族は子供の数を回復せよ。お荷物になる人は切り捨てだ。（中略）

いまや□べきであり、国家の役に立たない地域や個人が出てくれば、「そんなものは不要」という方向へ、この国の世論やメディアは動きつつあるかのようである。実はそこで抵抗する地域や個人の力をこそ、国家の再生に活用すべきものなのに。国家と地域の両者でできていたはずのこの国が、国家のみに傾倒し、地域を排除して、つまりは個人と国家しかないようなものへと、さらなる変転をつづけていくかのようである。

（山下祐介『地域学入門』筑摩書房）

問一　本文には次の一文が脱落しています。【ア】～【オ】のどこに補うのがもっとも適切ですか。一つ選び、記号で答えなさい。

かつては生きる術（すべ）は身近にあった。

問二　傍線部①「インターネットの言説空間」に見られるものとしてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　国際的な経済競争を勝ち抜くために挙国一致の傾向を強めていけば、互いに孤立してしまっている現代の国民も連帯感をもう一度取り戻すことができるという、歴史的に一定の妥当性を認めることができる社会観。

イ　個人として生きることに対する寄るべない不安感を、自分を守ってくれる強い存在を求めることで解消しようとし、そのためならば社会的弱者の排除や、異なる立場の意見を抑圧することもいとわない心理的傾向。

ウ　国家と自分とを同一視し、自分という弱い存在を守ってくれる国家を確かなものにしておきたいと願う、浅はかだが、インターネットという空間の公共性を考慮すると安易に排除することのできないナショナリズム。

エ　国家から切り離され個人として生きざるを得なくなったことで不安が生じるが、それを社会的な弱者や立場を異にする人々を批判することによって忘れようとする、強い国家の実現すら難しくするような自己中心的な主張。

オ　国家は国民の不安を取り除くために経済活動を保証する政策や国家体制づくりを行うべきであり、そのためならば政治家の専横も肯定されるという、社会の中に不要な競争や不正義を生むような危険な経済至上主義。

問三　傍線部②「個人主義と同様に、コスモポリタニズムもまたナショナリズムとコインの裏表のような関係にある」とはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　個人主義もコスモポリタニズムも国家ナショナリズムを否定するものではなく、前者は国家という存在を前提としている点で、後者は政治的文化的な侵略行為に他ならないという点で、むしろ国家ナショナリズムを強固なものにしていくものであるということ。

イ　個人主義もコスモポリタニズムも国家ナショナリズムを否定するものではなく、前者は国家と親和的な関係にあるという点で、後者は国家中心主義を徹底する傾向があるという点で、むしろ国家ナショナリズムと連動して生滅を繰り返すものであるということ。

ウ　個人主義もコスモポリタニズムも国家ナショナリズムを否定するものではなく、前者は孤立した状況に耐えられなくなるという点で、後者は政治的文化的に従来の集団に同化していこうとする点で、むしろナショナリズムに依存しているものであるということ。

エ　個人主義もコスモポリタニズムも国家ナショナリズムを否定するものではなく、前者は国家を前提として生まれた点で、後者はもともと存在していた集団への更なる弾圧を招くことになるという点で、むしろ国家ナショナリズムを解体するものであるということ。

オ　個人主義もコスモポリタニズムも国家ナショナリズムを否定するものではなく、前者は国家との関係を際立たせるという点で、後者は既成の枠組みの解体に対する反動を誘発するという点で、むしろ国家ナショナリズムをかきたてるものであるということ。

問四　傍線部③「地域主義」とありますが、「地域」とはかつてどのようなものでしたか。その説明となる次の文の［A］・［B］に入る言葉を、指定された字数で本文中から抜き出して答えなさい。

日本において地域は、自由を制限する代わりに人々に［A（五字）］や他者や集団とのつながりを提供していた場である。また、国家と個人を媒介するという意味で国家の形成と維持に［B（十字）］ものである。

問五　傍線部④「人々は思ったようには反応しないだろう」とありますが、その理由としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　個人の自由に価値を置き、国民が何者にも束縛されない状況が理想とされる社会では、安定を保つための国家の協力要請すら自由の制限と捉えるようになったから。

イ　国家に守られることを当たり前と捉え、不満なく生活を送るうちに、生活の基盤となる個人を大事にするという考え方を国民が持ちにくくなったから。

ウ　地域の機能が失われ国民が個人として国家に利己的な要求ばかりを行うようになるうちに、国民として主体的に果たすべき役割を意識しなくなったから。

エ　他の国家構成員の福祉のため税金の形で金銭を支払うことに抵抗を覚えるようになった結果、国民が国家の機能を理解することができなくなったから。

オ　国民が公共心を失っているため、政府から国家への協力や同調を求めても、それらが次の世代のために必要だという意識を保てなくなっているから。

問六　［　　］に入る表現としてもっとも適切なものを、**ア**～**オ**から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　地域や個人は国家を切り捨てる

イ　地域や個人に国家は頼る

ウ　地域や個人は国家に抵抗する

エ　地域や個人は国家の犠牲となる

オ　地域や個人を国家は守る

問七　本文の主旨と合致するものを、**ア**～**オ**から**すべて**選び、記号で答えなさい。

ア　国家が個人の独立を促したこと自体は、その結果はどうあれ、評価するべきである。

イ　日本社会における地域の存在感の低下の原因を、個人だけに帰することはできない。

ウ　コスモポリタンな社会は、キリスト教布教活動との関わりの中で形成された側面がある。

エ　国家や社会を運営していくことにかかわる負担は、広く分かち合われるべきである。

オ　国家ナショナリズムは、互いに連動しながら世界各国で盛り上がりをみせている。

4 次の問いに答えなさい。

批評家の小林秀雄の言葉に、次のようなものがあります。

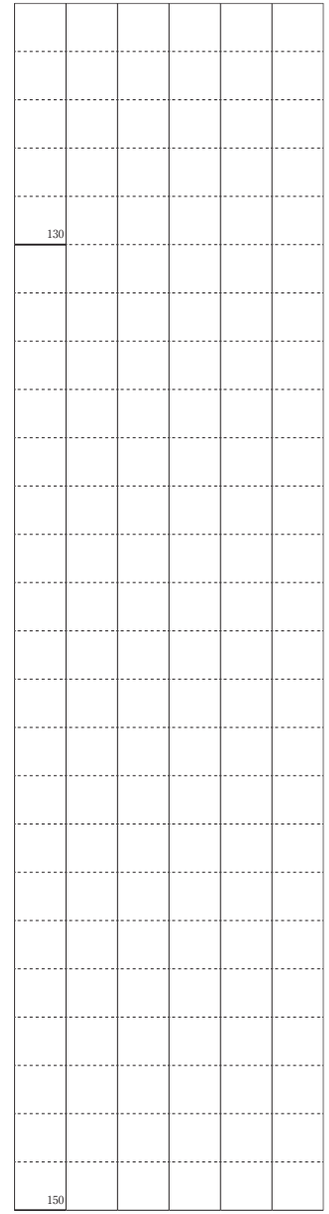
美しい「花」がある、「花」の美しさというようなものはない。

これをふまえて、あなたは、「美しい花」と「花の美しさ」の違いをどのように捉えますか。それぞれの違いを明確にして、あなたの考えを**一三〇字以上、一五〇字以内**で書きなさい。

注意事項

・解答欄の一マス目から書きなさい。
・段落を作ってはいけません。
・句読点や記号も一字とし、必ず一つのマス目を使いなさい。
・漢字で書けるものは漢字で書きなさい。
・書き言葉を使いなさい。

【下書き】



2023—K—①

二〇二三年度　高校入試　第一回

国語　解答用紙

東洋大学京北高等学校

受験番号	氏名

合計

1

問一
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

問二
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

問三
(1)
(2)
(3)

問四
(1)
(2)

問五

問六
(1)
(2)
(3)

問七

2

問一
問二
問三
問四
1
2
3
4
5

問五

問六

問七

3

問一
問二
問三
問四
A
B

問五

問六

問七

4

130

150

2023—K—①

二〇二三年度　高校入試　第一回　国語　解答用紙　東洋大学京北高等学校

受験番号	
氏名	
合計	

1

問一
(1) 待遇
(2) 要素
(3) 頒布
(4) 諭す
(5) 阻止

問二
(1) エ
(2) ウ
(3) ア
(4) ハ
(5) ウ

問三
(1) みずから知(し)らずといえども
(2) しようとにてぞおわしける
(3) いみじゅうはなばなと

問四
(1) エ
(2) ア

問五 エ

問六
(1) オ
(2) エ
(3) イ

問七 オ

各1点

1 20

2

問一 エ
問二 ウ
問三 オ

各4点

問四
1 オ
2 カ
3 エ
4 ウ
5 ア

↓完答4点

問五 まわりに迷 6点

問六 エ 4点

問七 ア・ウ・オ ↑完答4点

2 30

3

問一 イ
問二 イ
問三 オ

各4点

問四
A 生きる条件
B なくてはならないかった

↑完答6点

問五 ウ 4点

問六 エ 4点

問七 イ・ウ・エ ↑完答4点

3 30

4

130

150

4 20